

## II 遺 跡

### 1 調 査

**調査地周辺の遺跡** 調査対象地は奈良市四条大路1丁目760番地および762番地に所在する水田である。国鉄奈良駅より三条通り（旧平城京三条大路）を約1.2km西に向い、佐保川を越えた所にある関西電力奈良変電所の西南方約200mに位置する。当地は平城京左京四条二坊十五坪の北半部にあたる。本坊の北隣りの左京三条二坊は、平城京内でもっとも多くの発掘調査が行なわれた坊であり、坊内の様子がかかなり明らかになっているのに対し、本坊での既往の調査はわずかである。しかし、先に述べたように本坊が開発の波にまだ洗われずに奈良時代の遺構が良好な状況で残っているわけでは決してない。

これまで左京四条二坊では一・三・七・十六の4坪で6件の発掘調査がおこなわれている（fig. 8）。一坪では、当研究所が1983・84年に調査を実施し、北半中央部と西南部の様子を明らかにした。奈良時代前半には小規模な建物が散在するのみであるが、奈良時代の中頃には1坪を占める宅地が確実に成立し、坪の北半中央部に大規模な東西棟の正殿を置き、西南部にもL字形に建物を配す。奈良時代後半には正殿を同位置で建て替え前殿を設け、西南部の建物を撤去し八角形の井戸と堀を設ける。奈良時代後半の遺構については、天智天皇の曾孫で造東大寺司長官をも務めた市原王の邸宅である可能性が指摘されている。また、平城京の邸宅で使用した軒瓦の組合せが2組明らかとなった。三坪では当研究所が1983年にその東北部を調査し、建物配置には4時期の変遷が認められ、奈良時代の中頃から後半にかけて少なくとも三坪の北東4分の1町を占める宅地が成立する。七坪では、奈良市教育委員会が1983・84年に東南部と東半中央部を調査し、東二坊坊間路の路面と西側溝、七坪の東限を画す施設、坪内の小建物などを検出した。十六坪では奈良市教育委員会が1983年に西南部を調査し、掘立柱建物5棟などを検出した。

左京四条二坊の周辺部では4箇所の調査例がある。左京四条一坊十四坪では当研究所が1983年に東辺部を調査し、東一坊大路西側溝の位置を踏襲した中世の溝を検出した。左京三条二坊十三坪では榎原考古学研究所が1975年に南端中央部を調査し、三条大路路面・北側溝・坪内の建物・堀などを検出した。左京四条三坊一坪では当研究所が1977年に西南部を調査し、坪内の建物を検出したが、東二坊大路東側溝は佐保川の氾濫で破壊され検出できなかった。また、東二坊大路の路面については、左京四条二坊十四坪と同四条三坊三坪との間の位置で当研究所が1980年に調査した。

- 1 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984
- 2 奈良国立文化財研究所『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983 P. 49-50
- 3 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984 P. 28-39 P. 40-41
- 4 奈良国立文化財研究所『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1984 P. 44
- 5 奈良県立榎原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975
- 6 奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978 P. 25-26

**調査の経過** 第1次調査の対象地は奈良市四条大路1丁目760番地、第2次調査の対象地は同762番地に所在し、それぞれ平城京左京四条二坊十五坪の西北部南半と東部南半にあたる。ともに調査前は休耕田であった。第1次調査は分譲住宅の造成工事ともなう事前調査として実施し、調査面積は約600㎡、調査期間は1982年10月8日～11月9日である。南北42m・東西30mの敷地のほぼ中央に東西28m・南北21mの発掘区を設け、東西棟と南北棟の大規模な礎石建物を検出した。京内の宅地における礎石建物の検出は「宮跡庭園」の例に次ぐ。このうち東西棟建物の北側に建物がないか否かを調べるため、南北6.5m・東西3mの拡張区を設け精査したが、ここでは確認できなかった。第2次調査は賃貸用宿舍の建設ともなう事前調査として実施し、調査面積は約750㎡、調査期間は1984年5月22日～6月29日である。調査対象地は第1次調査地の東で1枚(約30m)の水田を隔てる。第1次調査で検出した大規模建物と関連する遺構の存在が考えられたため、第1次調査区の真東に東西30m・南北24mの発掘区を設け、中小規模の掘立柱建物を多数検出した。また条坊関連遺構の存在を探るため発掘区の東南隅に東西7m・南北5mの張出部を設けたが確認できなかった。

**層位** 第1次調査地の現地表は標高約59.65mである。土層は、①旧水田耕土(厚さ0.25m)、②床土層(厚さ0.2～0.3m)、③灰色粘質土層(厚さ0.2～0.3m)、④茶褐色まじり灰色粘土層(厚さ0.1～0.2m)、⑤暗赤褐粘質土層(厚さ0.1～0.2m)、⑥黄褐色ないし黄灰色粘土の地山の順で移行する。④⑤は調査区の一部にのみ分布し、奈良時代の遺構は⑤ないし⑥の上面で検出した。地山上面の標高は、調査区西端で58.70m、東端で58.90mである。第2次調査地の現地表は標高約59.80mである。土層は第1次調査地と基本的に同じで、地山上面の標高は58.90mである。

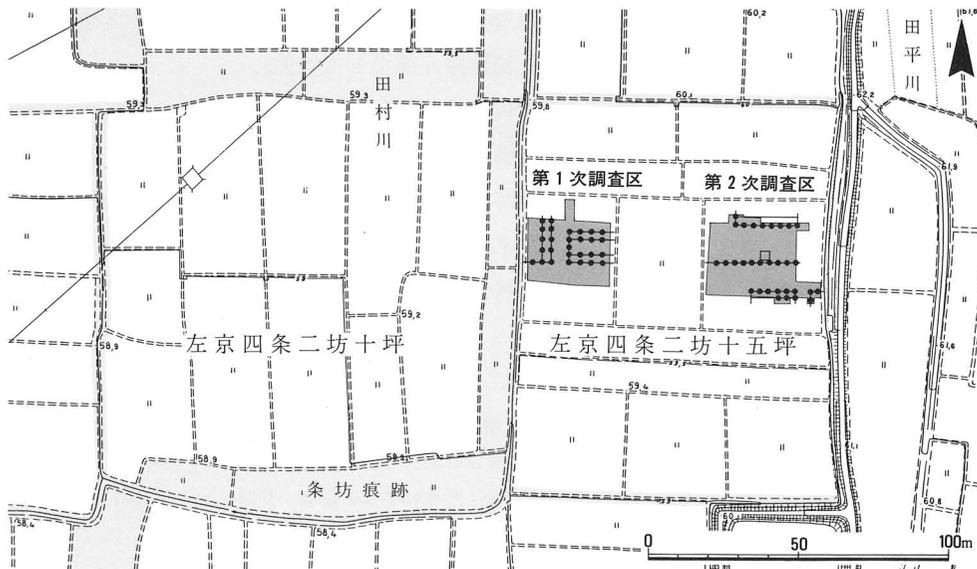


fig. 9 発掘区位置図(地名は小字名)

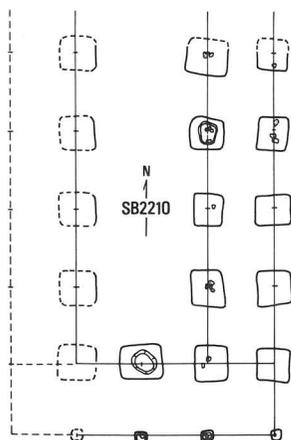
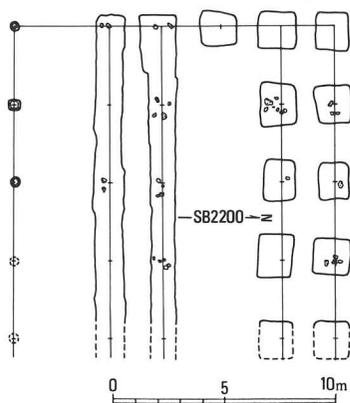
## 2 遺 構 (PL. 4~13, fig. 10・11)

第1次調査区で検出した主要な遺構は、礎石建物2棟、掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、土塙6基、溝数条、第2次調査区で検出した主要な遺構は、掘立柱建物10棟、掘立柱塀5条、井戸1基、溝数条、土塙数基である。整理の都合上遺構に一連番号を付し、その前にS A・S B・S D・S E・S Kなど遺構の種類を示す記号を付けた。( )内に記した寸法は天平尺に換算した数値である。

### 第1次調査検出遺構 S B 2200~S K 2245

**礎石建物S B 2200** 調査区東半部にある大規模な礎石建ち東西棟建物。桁行5間以上、梁行2間の身舎の南北二面に廂が取り付く。柱間は桁行3.6m(12尺)等間、梁行2.7m(9尺)等間、廂の出は2.4m(8尺)である。南側柱筋および入側柱筋は幅約1.3mの布掘地業をおこない、他の柱位置では1辺約1.5mの方形の壺掘地業をおこなう。現状の掘込みの深さは、遺構検出面から0.25~0.45mあり、内部は版築によってつき固める。版築層は灰色粘土と黄褐色粘土の互層で、1層の厚さは2.5~5cmで、掘込みの底面から0.2~0.4mの高さまで築土を積み上げ、その後根固め石を置き礎石を据える。礎石はすべて抜取っており、抜取り痕跡には礫・瓦塼類を捨てている。築土中からは平城宮Ⅲ(奈良時代中頃)の土器片が、南側柱筋の礎石抜取り痕跡からは軒平瓦6670Aが出土した。なお、この建物の南側柱列から4.5m(15尺)南に、建物と柱筋を揃える小柱穴列がある。これは縁ではなく廂と考えられ、出が大きいので床のない土廂であった可能性が大きい。この柱掘形には径0.4mの円形のもの、1辺0.5mの方形のものがある。いずれも小さく、廂は仮設的なものであろう。S B 2200は重複関係からS D 2212・S B 2220・S A 2240より新しい。

**礎石建物S B 2210** 調査区西半部にある大規模な礎石建ち南北棟建物。桁行5間以上、梁行2間の身舎に東廂が付く。西廂の存否は不明である。柱間は桁行3.6m(12尺)等間、梁行3m(10尺)等間、廂の出は3m(10尺)である。すべての柱位置に1辺約1.5mの方形の壺掘地業をおこなう。版築の方法や礎石の据付け方はS B 2200と同じである。礎石はすべて抜取っている。築土中および礎石抜取り痕跡から、平城宮Ⅲの土器が出土した。この建物の南妻から3.3m(11尺)の位置には、建物と柱筋を揃える小柱穴列があり、妻廂ないし広縁と考えられる。この柱穴の柱掘形は0.6m×0.5mの矩



形で、東端の柱穴には現存径約0.1mの腐朽した柱根が残り、他の柱穴には径約0.2mの柱痕跡がある。S B 2210は重複関係からみてS A 2215より古い。

S B 2200・S B 2210は、平城京の邸宅跡で検出した礎石建物の稀有の例であり、入念な基礎地業をおこなう点でも注目される。平城京における礎石建物の類例としては左京三条二坊六坪のS B 1540があり、掘立柱・礎石建ち混用の建物および掘立柱建物を礎石建ちに造り替えた建物は左京一条二坊十二坪の法華寺前身遺構にみられる。礎石建物の基礎地業には4種類がある。すなわち、①基壇の範囲全体におこなうもの、②柱筋に布掘地業をおこなうもの、③柱位置に壺掘地業をおこなうもの、④布掘地業・壺掘地業を併用するもの、である。藤原宮・平城宮において①～④それぞれの類例を求めると、①には平城宮南面東門S B 9500・南面正門S B 1800・西面南門S B 1616・西面中門S B 3600・推定第一次朝堂院南門S B 9200・推定第一次大極殿院南門S B 7801・推定第二次大極殿院東外郭東楼S B 7700が、②には平城宮西方官衛S B 5300・東院地区S B 8480が、③には藤原宮北面中門S B 1900・平城宮南面西門S B 10200が、④には平城宮推定第一次朝堂院の東第一堂S B 8400・東第二堂S B 8550などがある。今回検出のS B 2200は④、S B 2210は③の類例である。

**溝S D 2201** 調査区東南部の南北溝。幅0.4m、深さ0.12mである。重複関係からみてS B 2230より新しく、S B 2200より古い。

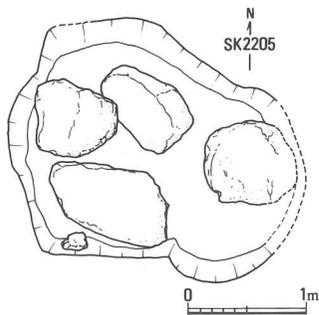
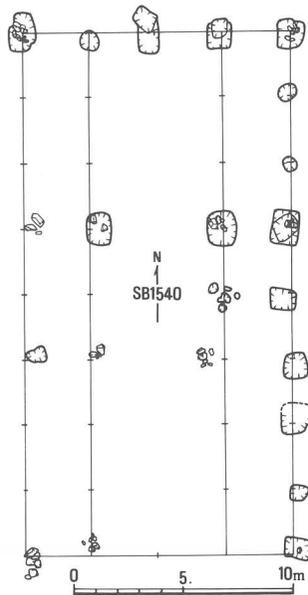
**土壌S K 2205** 調査区東南隅の土壌。長径2.6m、短径2.2m、深さ0.55mである。中に径0.8～1.2mの三笠山安山岩3個・溶結凝灰岩1個を落し込む。S B 2200ないしS B 2210の礎石であろうか。

**土壌S K 2206** S K 2205の西南側の土壌。長径4.4m、短径2.8m、深さ0.12mである。埋土から和同開珎が12枚重なった状況で出土した。重複関係からみてS B 2230より新しく、S B 2205より古い。

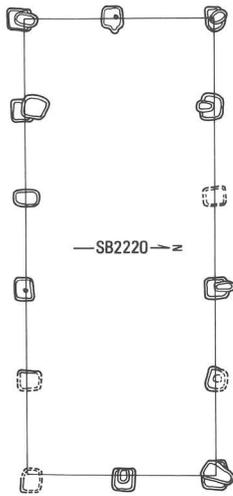
**土壌S K 2211** 調査区南端中央部やや東寄りの不整形土壌。長径5m、短径2m、深さ0.1mである。重複関係からみてS A 2240・S D 2212より新しく、S B 2230より古い。

**溝S D 2212** 調査区中央やや東寄りの南北溝。幅0.3m、深さ8cmである。重複関係からみてS A 2240より新しく、S K 2211・S B 2200より古い。

**塀S A 2215** 調査区西半部の掘立柱南北塀。柱間は2.4m（8尺）等間で7間分検出したが、さらに調査区外へ延びると考える。柱掘



形は0.5m×0.4m程の矩形で、南から1番目と4番目の柱穴には現存径約0.15mの腐朽した柱根が残るが、他は径約0.2mの柱痕跡のみである。重複関係からみてS B 2210より新しい。

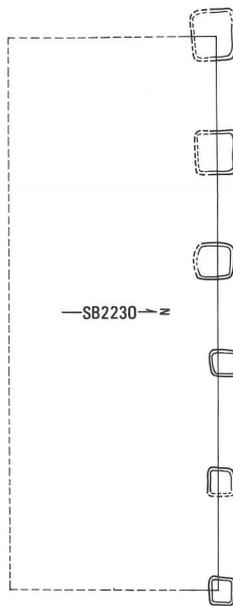


**建物S B 2220** 調査区中央部の掘立柱東西棟建物。桁行5間、梁行2間で、柱間は桁行・梁行ともに2.4m（8尺）等間である。柱掘形は1辺約0.6mの方形で、西妻中央の柱穴と南側柱列の東から3番目の柱穴には現存径約0.15mの腐朽した柱根が残存するが、他は柱を抜取る。重複関係からみてS B 2200より古い。

**塀S A 2225** 調査区西北隅の掘立柱南北塀。柱間は2.1m（7尺）等間で2間分検出した。柱掘形は0.7m×0.6mの矩形で、柱を抜取る。S B 2210の棟通りにあるため、この建物と関連するものかもしれない。

**土壌S K 2228** 調査区西北隅の不整形土壌で、深さ約8cmである。重複関係からみてS B 2200・S A 2225より古い。

**建物S B 2230** 調査区南端の掘立柱東西棟建物。桁行5間で、北の側柱列だけを確認した。柱間は2.95m（10尺）等間である。柱掘形は西の2個が大きく1辺約1.2~1.4mあり、他は0.8m×0.7m程の矩形である。柱はすべて抜取る。重複関係からみてS K 2211より新しくS D 2201より古い。



**土壌S K 2235** 調査区北辺中央の大土壌。方形で東西長3.3m、南北長は不明である。井戸の可能性を考え遺構検出面より2.3m下まで掘り下げたが底に達せず、確認できなかった。

**塀S A 2240** 調査区中央やや東寄りの掘立柱南北塀。柱間は3m（10尺）等間で4間分検出したが、さらに南北に延びると考える。柱掘形は0.9m×0.8m程の矩形で、柱を抜取る。重複関係からみてS D 2212・S K 2211・S B 2200より古い。

**足場S S 2242** S B 2210にともなう軒先の足場である。S B 2210の東側柱列から約2.3m（7.7尺）東に、3.2m~3.9m間隔で柱掘形が4個並ぶ。柱位置はS B 2210の各柱間中央通りである。S S 2242の位置からみてS B 2210の軒の出は5尺~6尺程であろう。柱掘形は北から3個目のものが1辺約0.3mの方形であるが、他は径約0.3mの円形である。

**土壌S K 2245** 調査区西端中央部の不整形土壌。深さは約0.17mである。重複関係からみてS B 2200より古い。



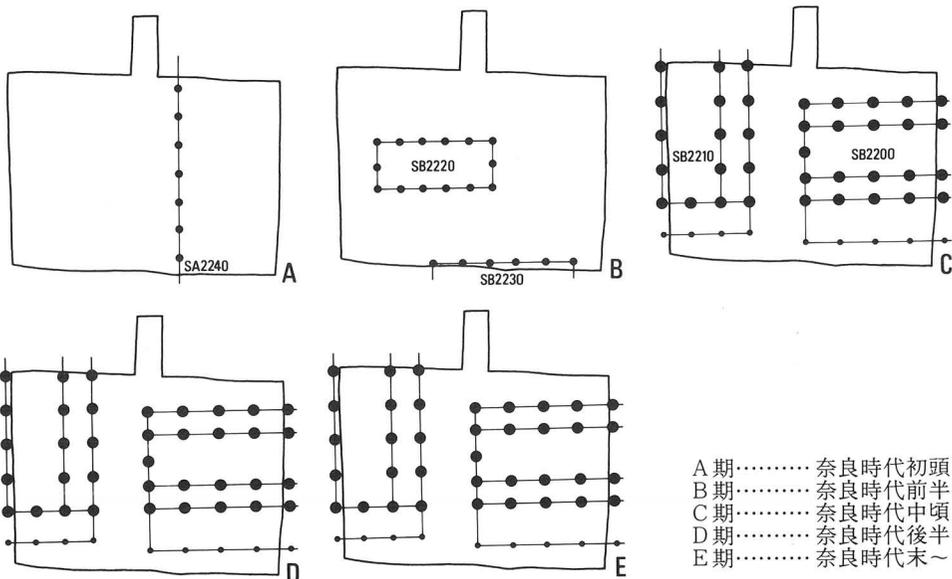
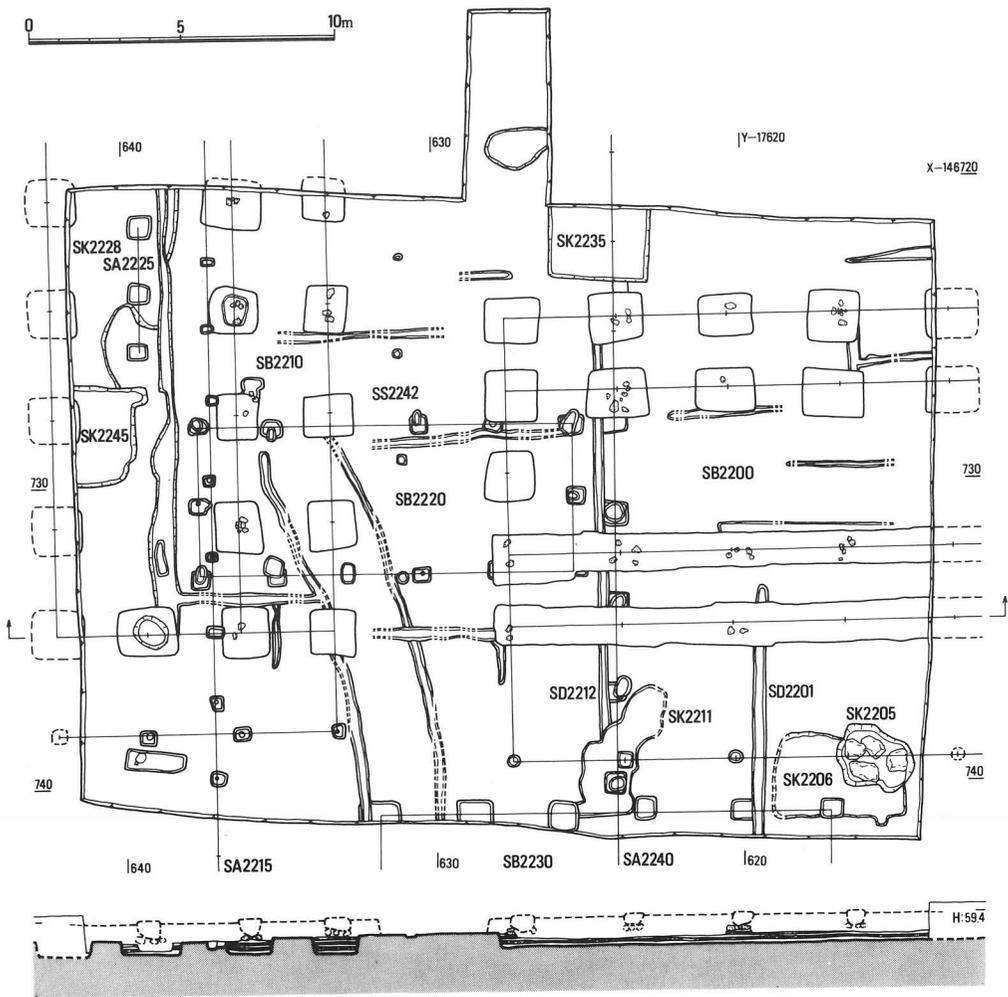
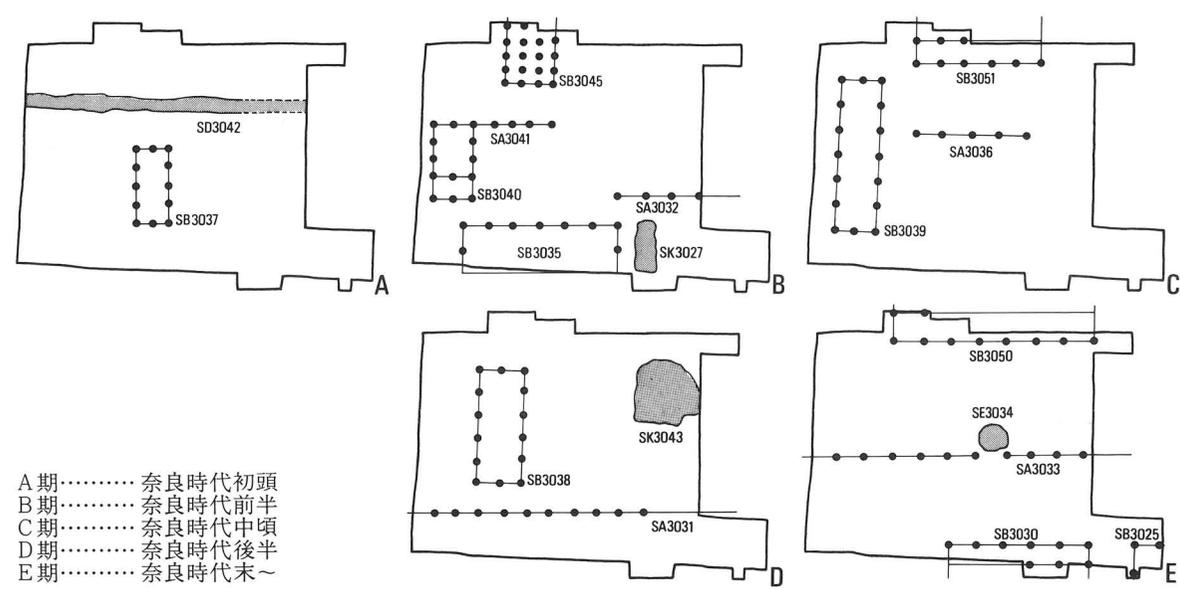
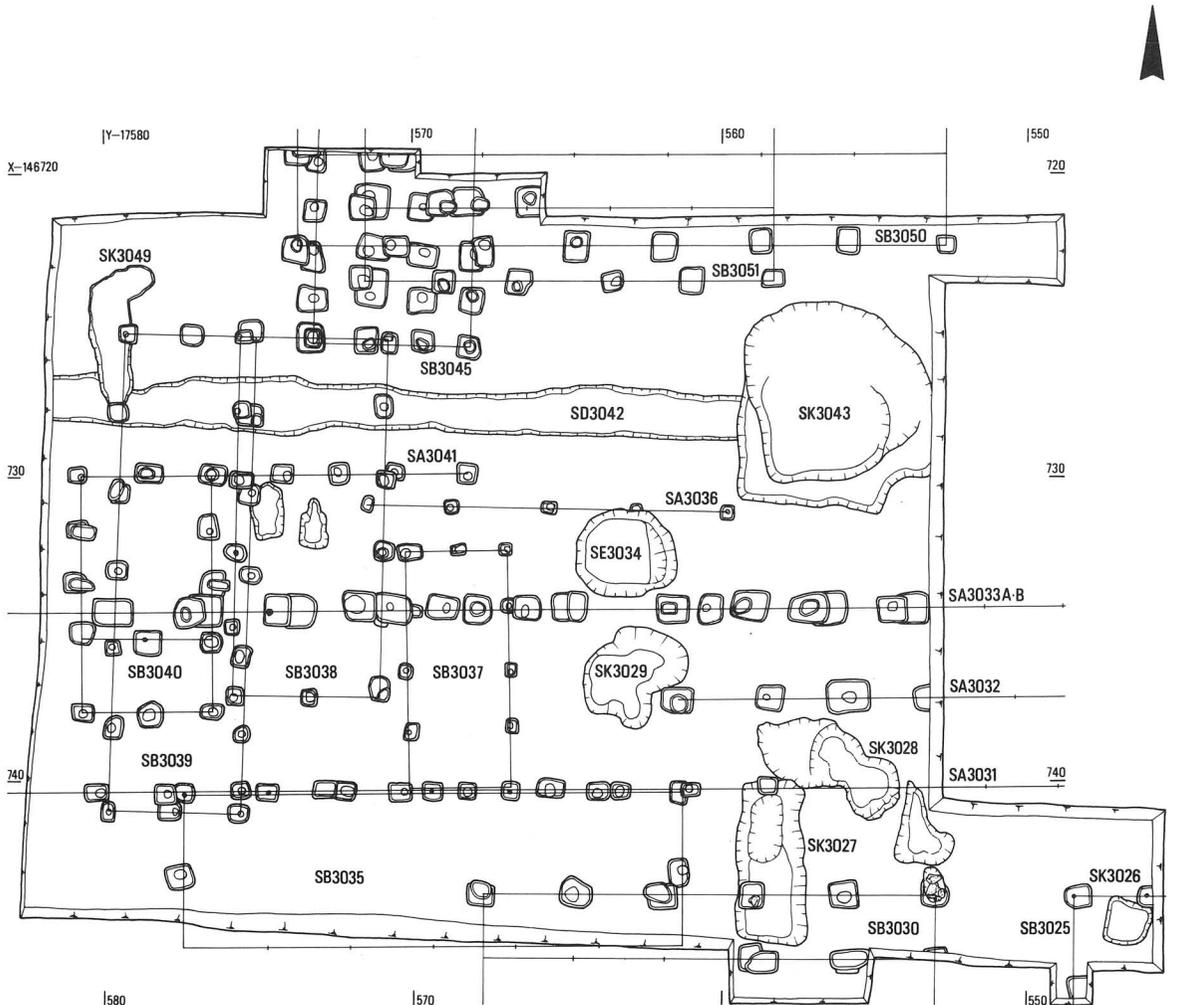


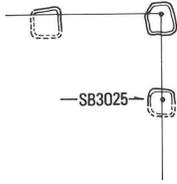
fig. 10 第1次調査区遺構図・遺構時期変遷図



A期…………… 奈良時代初頭  
 B期…………… 奈良時代前半  
 C期…………… 奈良時代中頃  
 D期…………… 奈良時代後半  
 E期…………… 奈良時代末～

fig. 11 第2次調査区遺構図・遺構時期変遷図

## 第2次調査検出遺構 S B 3025～S B 3051



**建物S B 3025** 調査区東南隅の掘立柱建物。建物の西北隅を検出したが、南北棟建物であろう。柱間は桁行3 m (10尺)、梁行2.35 m (8尺)である。柱掘形は0.9 m×0.8 m程の矩形で、妻柱の柱掘形には現存径0.1 mの腐朽した柱根が残る。西北隅の柱掘形から軒平瓦6663 Fが出土した。重複関係からみてS K 3026より新しい。

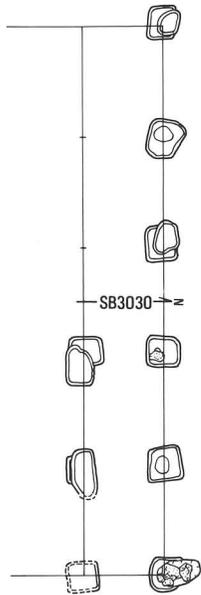
**土壌S K 3026** S B 3025と重複する不整形土壌。南北長1.6 m、東西長は不明である。埋土内から軒丸瓦6225 E・6227 Aのほか丸・平瓦が多数出土した。重複関係からみてS B 3025より古い。

**土壌S K 3027** 調査区南端東半部の土壌。隅丸長方形を呈し東西幅2.4 m、南北長5.2 m、深さ0.38 mである。埋土中から平城宮Ⅱ(奈良時代前半)の土器が多量に出土した。重複関係からS B 3030・S A 3031より古い。

**土壌S K 3028** S K 3027の東北に接した不整形土壌。東西長4.6 m、南北長3.4 m、深さ0.44 mで、S A 3031より新しい。

**土壌S K 3029** 調査区中央でS K 3028の西北にある不整形土壌。東西長・南北長ともに3.3 m、深さ0.21 mである。

**建物S B 3030** 調査区南端の掘立柱東西棟建物。桁行5間で北面に廂をもつ。柱間は桁行2.95 m (10尺)等間で、廂の出は2.1 m (7尺)である。柱掘形は1 m×0.9 mの矩形で、柱を抜取る。柱抜取痕跡のうち、北側柱列の東から1・3番目の内部には、径約0.4 mの礫を捨てている。重複関係からみてS K 3027・S B 3635・S K 3052より新しい。

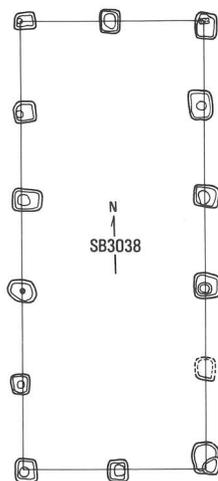
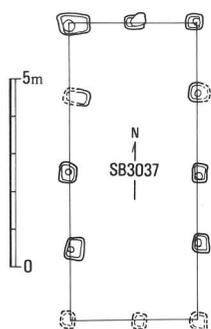
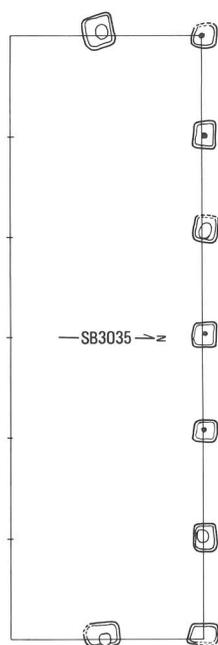


**塀S A 3031** 調査区南半中央部の掘立柱東西塀。柱間は2.4 m (8尺)等間で、9間分検出したがさらに東西に延びると考える。柱掘形は0.8 m×0.7 m程の矩形で、径約0.25 m程の柱痕跡がある。西から2番目の柱穴から平城宮Ⅲ(奈良時代中頃)以降の土器が出土した。重複関係からみてS B 3035より新しい。

**塀S A 3032** 調査区東端でS A 3031の北にある掘立柱東西塀。柱間は2.7 m (9尺)等間で3間分検出したが、さらに東西に延びると考える。柱掘形は西から3個目が1.4 m×1.1 mと大きく、他は0.9 m×0.8 mの矩形である。径約0.25 mの柱痕跡がある。西から2番目の柱穴から平城宮Ⅱ(奈良時代前半)の土器が出土した。

**塀S A 3033** 調査区中央の掘立柱東西塀。A・Bの2時期あり、1度造り替えている。Aを9間分、Bを8間分検出したが、さらに東





西に延びると考える。Aは柱間2.9m（9.8尺）等間である。柱掘形は1.2m×1m程の矩形で柱を抜取る。Bは柱間2.8m（9.4尺）等間で、東から3間目のみ柱間が5.8m（19.5尺）と広い。北に接してS E 3034があることから通路であったと考える。柱掘形は1.1m×0.9m程の矩形で、西から3個目の柱掘形には現存径約0.2mの腐朽した柱根が残るが、他の柱穴では柱を抜取る。東から2番目の柱穴から平城宮Ⅲ（奈良時代中頃）以降の土器が出土した。重複関係からみてA・BともにS B 3037・S B 3038・S B 3040よりあたらしい。

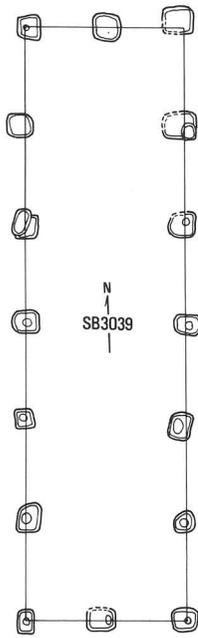
**井戸S E 3034** 調査区の中央部でS A 3033の北隣りにある井戸。掘形は南北長3m、東西長3.2m、深さ2mである。井戸枠はすべて抜取っており、抜取痕跡から丸・平瓦片が多数出土した。

**建物S B 3035** 調査区南端西半部の掘立柱東西棟建物。桁行6間、梁行2間以上で、柱間は桁行2.7m（9尺）等間、梁行2.5m（8.5尺）である。柱掘形は北側柱のものが0.7m×0.6m程の矩形で、妻の中央柱のものがやや大きく0.9m×0.8m程の矩形である。北側柱列の西から1・2・4・5番目の柱掘形には現存径約0.2mの腐朽した柱根が残るが、他の柱穴には径約0.3mの柱痕跡のみがある。北側柱列の西から2番目の柱穴の柱根上から平城宮Ⅲ（奈良時代中頃）の土器が出土した。柱が腐蝕した空洞に落下したものであろう。重複関係からみてS B 3030・S A 3031より古い。

**塀S A 3036** 調査区中央部でS E 3034の北に接した掘立柱東西塀。方向が東でやや南に振れる。4間あり、柱間は2.9m（9.9尺）等間である。柱掘形は0.5m×0.4m程の矩形で、径約0.2mの柱痕跡がある。重複関係からみてS E 3034より古い。

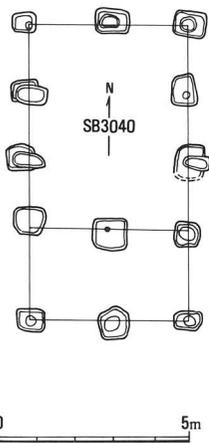
**建物S B 3037** 調査区中央部の掘立柱南北棟建物。棟の方向が北でやや西に振れる。桁行4間、梁行2間で、柱間は桁行が1.95m（6.5尺）等間、梁行が1.65m（5.5尺）等間である。南妻の柱掘形はS A 3031・S B 3035の柱掘形と重複し残っていない。柱掘形は0.6m×0.5m程の矩形で、北妻の中央と西の柱は抜取るが、他の柱穴には径約0.15mの柱痕跡がある。重複関係からみてS A 3031・S A 3033・S B 3035より古い。

**建物S B 3038** 調査区西半中央部の掘立柱南北棟建物。建物の棟の方向が北でやや東に振れる。桁行5間、梁行2間で、柱間は桁行・梁行とともに2.35m（8尺）等間である。柱掘形は1辺約0.6mの



方形である。西側柱列の南から3番目の柱穴には現存径約0.15mの腐朽した柱根が残存し、北妻の中央柱と東側柱列の北から1・4番目の柱を抜取る。他の柱穴には径約0.25mの柱痕跡がある。建物の東北隅の柱穴の柱抜取痕跡には埴2点と礫を捨てており、西側柱列の北から2番目の柱穴から平城宮Ⅲ（奈良時代中頃）以降の土器が出土した。重複関係からみてS B 3039・S A 3041より新しくS A 3033より古い。

**建物S B 3039** 調査区西端の掘立柱南北棟建物。棟の方向が北でやや東に振れる。桁行6間、梁行2間で、柱間は桁行2.6m（8.8尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間である。柱掘形は0.8m×0.7m程の矩形で、西側柱列の北から3番目と、北妻の東から1・2番目の柱を抜取る。他の柱穴には径約0.2m～0.25mの柱痕跡がある。北妻西端の柱穴から平城宮Ⅲ（奈良時代中頃）以降の土器が出土した。重複関係からみてS A 3031・S B 3038より古い。

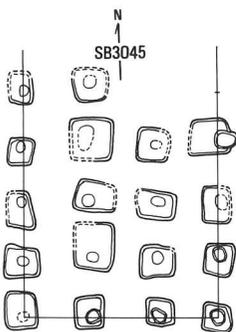


**建物S B 3040** 調査区南端の掘立柱南北棟建物。棟の方向が北でやや西に振れる。桁行3間・梁行2間の身舎の南面に廂が付く。柱間は桁行1.8m（8尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間で、廂の出は2.4m（8尺）である。建物規模のわりに柱掘形が大きく、0.9m×0.7m程で矩形を呈す。身舎南妻中央の柱掘形には現存径約0.25mの腐朽した柱根が残るが、他は柱を抜取る。重複関係からみてS A 3033Aより古い。

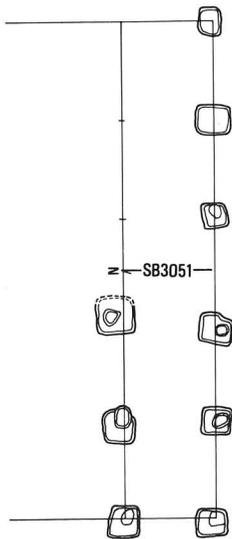
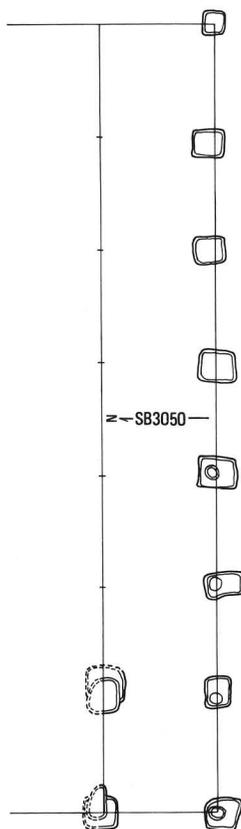
**塀S A 3031** S B 3034の北妻にとりつく掘立柱東西塀。4間あり、柱間は不揃いで1.6m（5.5尺）～2.4m（8尺）である。柱掘形は1辺約0.7m程の方形で、径約0.25mの柱痕跡がある。重複関係からみてS B 3038より古い。

**溝S D 3042** S A 3041の北側にある素掘りの東西溝。幅約1.7m、深さ約0.22mで、重複関係からみてS B 3038・S B 3039より古い。

**土壇S K 3043** 調査区東北隅にある大土壇。不整形で南北長約7m、東西長約6m、深さ約0.16mである。埋土から平城宮Ⅳ（奈良時代後半）の土器が多量に出土した。重複関係からみてS D 3042より新しい。



**建物S B 3045** 調査区北端の掘立柱南北棟建物。棟の方向が北でやや東に振れる。桁行4間以上、梁行3間の総柱建物で、柱間は桁行1.5m（5尺）等間、梁行1.7m（5.7尺）等間である。柱掘形は、1.2m×1m程の大きいものが2ヶ所あるが、他は1m×0.8m程の



矩形である。各柱穴には径約30cmの柱痕跡がある。西側柱列の南から3番目の柱痕跡から平城宮Ⅳ（奈良時代後半）～Ⅴ（奈良時代末）の土器が出土した。柱根が腐蝕した空洞に落下したものであろう。重複関係からみてS B 3038・S B 3050・S B 3051より古い。

**土壌S K 3049** 調査区西北隅の不整形土壌。南北長約4 m、東西幅約2 m、深さ約7 cmである。埋土から平城宮Ⅳ（奈良時代後半）の土器が出土した。重複関係からみてS B 3039より新しい。

**建物S B 3050** 調査区北端の掘立柱東西棟建物。桁行7間で少なくとも南面に廂をもつ。柱間は桁行3 m（10尺）等間で、廂の出も3 m（10尺）である。柱掘形は南側柱列の東端のものが0.6 m×0.6 mと小さいが、他は0.9 m×0.8 m程の矩形である。入側柱の柱穴のうち検出した2ヶ所については柱を抜取るが、南側柱の柱穴には径約0.35 m程の柱痕跡がある。南側柱列の西端の柱穴では、柱の下に埴と板を敷いていた。重複関係からみてS B 3045より新しい。

**建物S B 3051** 調査区北端の掘立柱東西棟建物。桁行5間で少なくとも南面に廂をもつ。柱間は桁行の中央間のみ3.1 m（10.5尺）と広く、他は2.5 m（8.5尺）、廂の出は2.4 m（8尺）である。柱掘形は0.9 m×0.8 m程の矩形で、柱はすべて抜取る。南側柱列の東から2番目の柱穴から、平城宮Ⅲ（奈良時代中頃）以降の土器が出土した。重複関係からみてS B 3045より新しい。

遺構	棟方向	規模	廂	桁行 m(尺)	梁行 m(尺)	廂 m(尺)
S B 2200	E・W	5以上×4	N・S	18.0(60)以上	11.9(40)	2.4(8)
S B 2210	N・S	5以上×3以上	E	18.0(60)以上	9.0(30)以上	3.0(10)
S A 2215	N・S	7以上		17.1(56)以上		
S B 2220	E・W	5×2		12.0(40)	4.8(16)	
S A 2225	N・S	2以上		4.2(14)以上		
S B 2230	E・W	5×?		14.7(50)	?	
S A 2240	N・S	4以上		12.0(40)以上		
S B 3025	N・S	?×?		3.0(10)以上	2.35(8)以上	
S B 3030	E・W	5×?	N	14.7(50)	?	2.1(7)
S A 3031	E・W	9以上		21.6(72)以上		
S A 3032	E・W	3以上		8.1(27)以上		
S A 3033 A	E・W	9以上		26.0(88)以上		
S A 3033 B	E・W	8以上		25.3(85.5)以上		
S B 3035	E・W	6×2以上		16.2(54)	5.0(17)以上	
S A 3036	E・W	4		11.7(39.5)		
S B 3037	N・S	4×2		7.9(26)	3.3(11)	
S B 3038	N・S	5×2		11.8(40)	4.7(16)	
S B 3039	N・S	6×2		15.7(53)	4.3(14)	
S B 3040	N・S	4×2	S	5.3(18)	4.2(14)	2.4(8)
S A 3041	E・W	4		8.3(28)		
S B 3045	N・S	4以上×3		6.0(20)以上	5.1(17.1)	
S B 3050	E・W	7×?	S	21.0(70)	?	3.0(10)
S B 3051	E・W	5×?	S	13.3(44.5)	?	2.4(8)

tab. 3 建物・堀一覧表